

追想
田口富久治



(上・左)
2004年7月
オーストラリアにて

目次

追想

かけがえのない友人	田中	浩	一四
知の人か情熱の人か―田口富久治先生	渡邊	昭夫	一六
懐旧には余りある追想	中谷	義和	一八
田口先生のお旅立ちの幸いをお祈りして	渡辺	俊彦	二七
「第二の師匠」田口先生	加茂	利男	三四
「あの世」への訪問	水口	憲人	四〇
田口富久治先生の学恩に深く感謝	松下	冽	四七
田口先生の思い出	西尾	敬義	五六
マクファーソン教授との「めぐりあい」と田口富久治先生	藤本	博	六四
田口先生の思い出	國廣	敏文	七一
田口富久治先生との二度の出会い	北住	炯一	九〇
「以て瞑すべし」	小西	中和	九四

日本政治学史と田口富久治先生

田口先生の思い出と私の知的遍歴	加藤	哲郎	一〇〇
バス停にて	木村	宏恒	一〇九
田口富久治先生の思い出	梅川	正美	一一七
先生、ありがとうございます	小野	耕二	一二四
田口富久治先生を仰ぎ見て	川崎	信文	一三一
田口先生とフランス	北川	忠明	一四一
田口・不破論争のころを振り返って	西村	茂	一四七
苦闘の二年間から得たもの	後	房雄	一四九
真摯で誠実な先生の姿から	中嶋	哲彦	一五九
思い浮かぶこと 点描	岡本	仁宏	一六六
追悼・田口富久治先生	鈴木	桂樹	一七一
田口ゼミの思い出	日詰	一幸	一七五
一九七八、九年ころの法学部田口ゼミ	牧野	雅彦	一八四
田口先生の思い出…一人の女弟子として	井上	洋	一八九
	岩本美砂子		一九九

実に雑駁な田口富久治先生への追想 偲ぶにも力量が必要と悟った弟子より
マルクス主義政治学の「喪失」

伽藍がなお赤かったとき―田口研究室への私の「国内留学」

最高の読者としての田口先生

田口富久治先生の指導の下で名古屋で過ごした日々

田口富久治先生が私にくださったもの

留学「悲感」

平和という遺伝子

遠くから眺めていた孫弟子として

二つの会で田口先生に教えられたこと

最後の弟子として

たとえその時はわからなくても

田口富久治先生との邂逅

浪人生の受験勉強に付き合ってくださいました田口先生

立命館大学政策科学部時代の田口先生を垣間見て

白石 克孝 二〇六

鈴木 規夫 二二二

鳴子 博子 二一八

富田 宏治 二二六

毛 桂榮 二二二

渡辺 博明 二四二

李 相睦 二四九

金 光旭 二五六

堀江 孝司 二六二

鈴木 一字 二七〇

鈴木 一人 二八三

田村 哲樹 二八九

大園 誠 二九六

柳原 克行 三〇五

森 道哉 三二四

田口 富久治 三二一

三二二

三二三

三二六

三五二

三六七

三八一

四〇三

四二三

四四四

四六三

五一五

五一七

思い出すままに

思いだすままに (一)

思い出すままに (二)

思い出すままに (三)

思い出すままに (四)

思い出すままに (五)

思い出すままに (六)

思いだすままに (七)

思いだすままに (八) 完

略歴及び著作

ご寄附いただいた皆様

編集後記

かけがえのない友人

田中浩（二橋大学名誉教授）

田口さんと始めてお会いしたのは、昭和二九年の春頃、ではなかったかと思えますので、七〇年位のお付き合いだったのではないでしようか。きっかけは、私の佐賀中学の一年後輩で尾高ゼミの丹宗昭信君（特別研究生）から、法学科の研究室にもものすごく威勢の良い人がいるので、少し大人しくするように会ってみてくれないか——丹宗君は田口さんの将来を心配してそう言ったと思いますが——というので法学部の助手室の「ろうか」の「長いす」でお会いしたのが最初だったと思います。

お会いして見ると、まことに真面目なお人柄で、ちつとも烈しいことはない人なので、法学部の連中はなにを恐れているのか不思議に思いました。それ以後田

口さんとは長い長いお付き合いとなり、かれは柔軟な考えの持主だったので一度も意見が合わないことはなく、困るとすぐに相談してきました。人柄は真正直、勉強家、人の言うことはよく聞く、面倒見が良く、政治学会の中では一番人氣があったのではないかと思います。しかし当時の政治学会は保守的でない分じめに会っていたようですが、かれは良くがまんしてそれにたえ、たくさんのお弟子さんを育てました。

今思うと政治学会の中では、田口さんと一番親しくさせていただいたと感謝しております。

かれの学問的業績や行動についてはお弟子さんたちがお話になりました。わたくしはただ、田口さんの思い出だけを述べますが、本当に本当に良い友人であつたと思います。

立派な「偲ぶ会」の本ができますよう念じております。

二〇二三年六月二九日

一 東大闘争の頃、マルクス主義政治学の旗手田口先生

田口富久治先生に直接ご指導を受けたのは、一九七八年四月から七九年一二月の名古屋大学法学部助手時代である。当時ドイツに留学し、いくつか学術論文を書いていたとはいえ、正規の大学院も出ていない民間出版社の一編集者であった私を、国家公務員である研究助手に登用するにあたっては、田口先生の大変なご尽力があったにちがいない。当時の名古屋大学法学部の教授会・助手会・大学院生自治会の自治の伝統については、赴任してから知った。後に助手論文『コミンテルンの世界像』（青木書店、一九九一年）で、名古屋大学から博士号も授与さ

れた（加藤「コミンテルンの伝統と遺産」『唯物論』九六号、二〇二二年）。

もっとも初めてお会いしたのは、そこからさらに十年ほど遡る。いわゆる東大闘争のさなかである。当時、私は東京大学新聞編集部員から法学部学生自治会緑会委員会の委員長・学生大会議長をつとめていた。全国・全学の学生運動の高揚と諸党派の競合、六〇年安保以来の規模で一般学生の多くが加わった大学民主化闘争の中で、ベトナム戦争、七〇年安保・沖縄闘争への関わり方をはじめ、学生活動家の「理論武装」が不可欠であった。

当時の東大法学部教授会は、エリート法曹養成の「東大五年制案」を検討していた。東大全共闘は「大学解体」「知の特権性批判」をかかっていた。緑会委員会が「法学に科学の光を」と主張するためには、自ら主体的に学習・研鑽し、それを自主ゼミナールに組織することが必要であった。無期限ストライキのバリケード内で花開いた自主ゼミナール運動の端緒は、緑会委員会が主導した「東大法学部——栄光と汚辱の九十年」という学生による学部史の編纂であった。生硬な講座派風日本史と学生運動史を接ぎ木した習作ではあったが、開成学校以来の歴史を辿り、法律学科と政治学科の関係・学生数の推移、講座と教員・カリキュラ

ムの編成などの検討を行った（『緑会雑誌』復刊七号、一九七〇年）。

法学の世界では、全国の研究者が民科法律部会等に組織されていて、学生たちも全国法学ゼミナールというネットワークを持っていた。東大社研の法学系教員らを中心に、一九六七年には民科法律学校という学生向けの連続講座が開講されていた。それに対して、法学部のマイノリティである政治学志望の学生には、丸山眞男という「近代主義の巨星」はいても、マルクス主義政治学やアメリカ政治学批判を志す学生には理論的指針がなかった。

そこに現れたのが、丸山門下でありながら、マルクス主義政治学を提唱する田口富久治先生で、私たちが学生運動の合間に読んだ「現代の日本と政治学の課題」（『学生新聞』第三〇八号、一九六八年二月二五日号）が導きの糸だった。後に『現代政治学の諸潮流』（未来社、一九七三年）の巻頭に置かれたこの論文が、当時無期限ストライキ中の政治学志望学生のバイブルになり、勉強会が組織され研究会にきてもらった。近代政治学とマルクス主義を「二つの政治学の対抗」と鮮やかに対比し、国家論を焦点とする理論化の方向を示し、行政学にまで視野を広げた刺激的な論文だった。国際的な学生運動やベトナム反戦運動ばかりでなく、

中国文化大革命やチェコスロヴァキア「プラハの春」を見ながらマルクス主義の再構築を志していた私たちには、「いちじるしく立ち後れている」マルクス主義政治学の課題として「現実の社会主義国家の実情及び社会主義諸国家間の国際関係」を明示した田口先生の論稿は、我が意を得たりだった。田口先生はこれを、『マルクス主義政治理論の基本問題』（青木書店、一九七一年）や佐々木一郎・加茂利男との共著『政治の科学』（青木書店、一九七二年）へと展開していった。

二 田口Ⅱ不破論争、ネオ・マルクス主義と日本政治学史

一九七〇年代初めに、私は大月書店編集部に在籍した。当時のソ連・東独での新MEGA刊行計画にあわせて、一九七二―七三年東独に留学した。私個人にとっては、その東独での現存社会主義体験が決定的で、従来のマルクス主義では現代世界を解けない、現存社会主義の歴史とスターリン主義批判が不可欠だと痛感した。帰国時に西欧諸国をまわって、いわゆるユーロコミュニズムと西欧マルクス主義の流れに接したので、田口先生のミリバンドⅡプランザス論争紹介を含

むマルクス主義国家論の刷新、労働組合運動と階級闘争ばかりでなく議会・自治体や住民運動・市民運動に着目する先進国革命論は新鮮だった。

そこから大月書店でも、スターリン主義批判と先進国革命論のシリーズを企画し、その目玉の一つが、田口先生の『先進国革命と多元的社会主义』(大月書店、一九七八年)だった。これがいわゆる「田口」不破論争のもとになり、編集者であった私も名古屋大学助手に転じて、田口先生の主張を裏付ける歴史資料と欧米文献収集をお手伝いした。この日本共産党との多元的社会主义をめぐる論争は、東欧革命時に一緒に寄稿した『日本共産党への手紙』(教育史料出版会、一九九〇年)では、私自身が共産党の集中的批判の対象とされた。ソ連崩壊後に共産党は丸山眞男批判に踏み込み、田口先生も共産党系政治学との訣別をきっぱりと表明した。それから三〇年以上経って、最近の日本共産党の政治的・組織的衰退と「民主集中制」をめぐる除名騒ぎを見ると、田口」不破論争は、二〇世紀末には決着がついていた、田口先生の先見性を示していたといえる。

田口先生が名古屋大学から立命館大学に移り、私は一橋大学で旧ソ連秘密文書の解説による日本人粛清犠牲者発掘や米国国立公文書館文書による占領期日本の

研究を始めたが、田口先生の『戦後日本政治学史』(東京大学出版会、二〇〇一年)は、多くの学部ゼミ生・大学院生を教育していく際の、貴重な指針となった。かつての「マルクス主義政治学と近代政治学の対抗」から、むしろ丸山眞男を中心とした広義の近代政治学史の展開の中に、かつてマルクス主義政治学の課題とした問題群への応答が嵌め込まれていた。そしてそれは、雑誌『レヴアヘアサン』等アメリカ政治学の変容をも視野に入れながら、プーランザス、ジェソップ、オツフェ、ギデンスらのネオ・マルクス主義の議論を採り入れる方向で、マルクス・レーニン主義とは訣別し、丸山政治学との接合が試みられた。私自身も、グラムシを基底におきつつ、同じ方向での理論構築をめざした(加藤『二〇世紀を越えて』二〇〇一年、『情報戦の時代』二〇〇七年、花伝社)。

晩年の田口先生からは、柄谷行人の交換様式論などマルクス主義の新展開とその評価について時折問合せを受けた。もう少し長くお元気だったら、おそらく齋藤幸平のエコロジー社会主義が組上にのぼり、「読書ノート」が書かれただろう。

三 民族派政治学の台頭に、田口先生ならどう応えただろうか

こうした日本政治学史の最先端での田口先生の探求と自省の歩みを後追いしてきたものの、田口先生のご逝去と私自身の大病を経て、一つの見落としに気がついた。それは、田口先生が丸山政治学のいわば左からマルクス主義政治学を志した朝鮮戦争期に、丸山政治学より右に、民族主義的・国家主義的政治学を志した保守的学生グループ「土曜会」があり、その流れが近年台頭してきたことである。学生土曜会は、東大法学部生を中心に一九五〇年に創設され、卒業生の指導により受け継がれてきたらしい。民主主義科学者協会や選挙制の日本学術会議に対抗し、反共・親米の世論づくりと日本の再軍備・核武装も視野に入れていた。

東大土曜会とは、佐藤内閣の沖繩返還交渉に重要な役割を果たした国際政治学者若泉敬、警察官僚の佐々淳行、いわゆる現実主義派の活躍の場であった『中央公論』編集長粕谷一希らが、共産党系学者の大学への浸透、南原繁学長の全面講和論等に対抗して創設した、保守派・民族派の理論グループであった。志垣民郎・岸俊光『内閣調査室秘録——戦後思想を動かした男』（文春新書、二〇一九年）が暴露したように、内閣調査室の委託研究などを用いてリベラル派を含む百

人以上の知識人に働きかけ、政策研究を通じて自民党政権・官僚機構と結びつき、保守系政治学者・国際政治学者育成に重要な役割を果たした。

一九五〇年の創設から八〇年代まで存続が確認されており、政治思想史の坂本多加雄や新しい歴史教科書を作る会、日本会議への流れをうみだした。香山健一・西部邁・佐藤誠三郎・公文俊平・山崎正和らと直接・間接に結びつき、北岡伸一・御厨貴らを研究会に取り込んで、大学のみならず、内閣情報調査室や各官庁、シンクタンク・大手メディア・出版界に人材を送り込んできたらしい。

詳しくは、志ある若い研究者が、二〇一七年に国会図書館憲政資料室に入った「福留民夫氏旧蔵若泉敬関係文書」「土曜会資料」、それについて最近公開が始まった岸俊光編「志垣民郎旧蔵 オンライン版内調資料」（丸善雄松堂）などによって、ぜひその全貌を明らかにしてほしい。

もっとも田口先生は、『戦後日本政治学史』の前に『日本政治学史の源流——小野塚喜平次の政治学』（未來社、一九八五年）を書いていた。自らは『丸山眞男とマルクスのはざま』（日本経済評論社、二〇〇五年）といいつつ、小野塚喜平次から吉野作造・南原繁・丸山眞男ら戦後日本政治学の主流に連なる流れば

かりではなく、蟬山政道を媒介に、神川彦松・矢部貞治らの傍流をも視野に収めていた。土曜会の存在自体は知らなかったろうが、日本の政治学の「来歴」から、民族派政治学や日本会議への逆流の可能性をも、見出していたのかもしれない。ここでも、先見の明があったというべきである。

(二〇二三年一月二五日)

編集後記

本書は、二〇二二年五月二三日に故人となった田口富久治先生に思いを致し、ご友人やご同僚、弟子筋の方など生前にご縁のあつた皆さまから、先生の思い出を寄せていただいたものです。

戦後日本におけるマルクス主義政治学の建設を率先して切り開かれた先生は、多方面にわたり顕著な学術研究をご発表され、学界にインパクトを与えてきました。後続研究者に対する情熱的な教育指導や、論壇等における精力的な社会活動もよく知られた一面です。先生の歩みは、日本の戦後政治学史における一つの大きな軌跡でもあります。私たちは九一年におよぶ先生の足跡に敬意を払い、哀悼を表するとともに、記憶と記録に留めるため、追悼集を発刊することとしたものです。

先生がご自身の来歴を回顧したものととしては、次のものがあります。

「わたしの読書へんれき」（住井すゑ・宮原誠一・小川太郎・東上高志編『世に出ていく君たちに 第四巻』汐文社、一九六六年）

「私の個人史とマルクス主義」（古在由重編『知識人と現代——研究者の記録』青木書店、一九七七年）

「私とマルクス主義と政治学——田口富久治先生に聞く」（聞き手中谷義和・小野耕二・後房雄、『名古屋大学法政論集』一五五号、一九九四年）

「私とマルクス主義と政治学——名古屋大学最終講義から」（『解放と自己実現の政治学』近代文藝社、一九九五年）

「思い出すままに（一）（八）完」（『象』三七〜四一、四三〜四五号、二〇〇〇〜〇三年）※本書所収

「五〇年の研究生活を振り返って——いま思うこと」（『丸山眞男とマルクスとのはざままで』日本経済評論社、二〇〇五年）

このうち「思い出すままに」は本書に再録しました。また、『戦後日本政治学史』（東京大学出版会、二〇〇一年）をはじめ、ご著作やご論考のはしほしに先生の生きた時代が語られていることも私たちの知るところです。本書はこれらと並び、関係者の視点から先生のいろいろな横顔を書きとめる記録としての意味ももつものです。

本書の経緯は以下の通りです。ご逝去の約一ヶ月後の六月二二日、編者三人は追悼するための場をつくることができなにか、オンラインで打合せを行いました。編者のうち、田村は先生の名古屋大学時代の最後の学部ゼミ生であり、孫弟子にあたります。大園は晩年の先生と親しく付き合っていました。酒井は田村の名古屋大学大学院の元指導生であり、日本政治学史の勉強をしています。打合せではお別れの会、追想集、旧蔵文書の保存などについて素案を議論しましたが、なおよく検討するためこの日は散りました。

最初の動きは追悼会の開催です。九月、中谷義和先生から「田口先生の追悼会を開催しなければと思っています」と田村にご相談がありました。一〇月一日、龍谷大学で開催された日本政治学会大会の会場において田村、酒井、中谷先生の間

で打合せがもたれ、田村を中心として偲ぶ会の開催を検討することとしました。ご遺族に会の開催についてご了解をいただき、約半年間の準備期間を経て、二〇二三年五月六日に名古屋・池下のホテルルブラ王山において、三〇人以上の関係者やご遺族のご出席を得て、ささやかながら「田口富久治先生を偲ぶ会」を開催しました。皆さまから先生の思い出をお話しいただき、得難い時間となりました。本書は同会の延長でもあります。会に出席がかなわなかった方も含めて、先生の思い出を募り、追悼集という形で記録に留めたいと考え、私たちは六月から関係の皆さま宛に、出版費用のご寄附とご寄稿を依頼しました。ご快諾いただいた皆さまに感謝いたします。私たちの至らなから、本来ご寄稿を依頼すべき方が漏れていることを恐れます。本書の出版費用は、巻末に掲載した寄附者の皆さまからのご支援により賄われたものです。

また、偲ぶ会事務局の活動として並行して行った、先生の旧蔵文書の保存についてもここで付言したいと思えます。まず、先生の蔵書については、既に関係者のご尽力により、六、三七五冊（和書五、四〇三冊、洋書九七二冊）が愛知学院大学図書館情報センターに寄贈され、二〇一二年に「田口文庫」が開設されてい

ます。二〇二二年一月二六日、私たちは田口文庫を見学し、詳しいお話をお聞きしました。お時間をいただいた田島俊英事務長にお礼申し上げます。

その一方で、ご自宅に残された先生の旧蔵文書の保存という課題がありました。先生のノートや収集された非公刊資料などでもできる限り保存したいと考え、二〇二三年三月二六日、私たちはご自宅で文書の状況を調査確認し、その後、複数の機関とのご相談を経て、最終的に東京大学大学院法学政治学研究所附属近代日本法政史料センターに受贈をお引き受けいただきました。発送・寄贈作業は一〇月二三日に行いました。収蔵スペースに限りがある中で快諾いただいた同センターの松本洵先生、並びに取り次ぎくださった関係の方々に感謝いたします。

本書冒頭の写真はご遺族の田口道代様からご提供いただいたものです。偲ぶ会の活動に対し様々なご支援をくださり、深く感謝申し上げます。また、『象』誌におかれては先生の原稿の再録をご了承いただいたことにお礼いたします。

本書が先生の来し方を振り返り、残された遺産を引き継ぐ一助となることを願ってやみません。

田口富久治先生を偲ぶ会事務局

田村哲樹

大園 誠

酒井大輔

追想 田口富久治

二〇二四年一月八日 初版発行

編集 田口富久治先生を偲ぶ会事務局

taguchi.shinobukai@gmail.com

印刷所 ブイツーソリューション